

# 協和うとう会のあゆみ

第31回から十年の足跡

安嶋 将

第31回  
平成4年  
(1992)

## 謡曲「杜若」ゆかりの地 知立の弘法大師のお寺で謡う

前年の第30回記念大会を防府市で開いた後、三十周年記念誌「うとう」の編集に取りかかり、この第31回間近の十月に発行した。記念大会までの余韻を胸に、また協和うとう会を盛り上げていこうというわけであった。

会場は、謡曲「杜若」(かさつばた)の舞台である知立市で協和発酵の関係会社の工場長を務めておられた平尾学さんが、地元でのお付き合いを通じて弘法大師が建てられたというお寺・遍照院の大広間を借りることができた。

ご住職夫人も謡曲を嗜んだことがあるということもあって、極めて好意的であった。名古屋支社が地元ということ、当時支社食品所属の西野邦明さんが会場設営関係の事務を一手に引き受けた。同じ食品に「能面」を彫る田中源司さんがおられ、幾つかの作品のほか制

作過程がわかるように、制作途中のものやノミなどの道具も会場に持ち込んで展示した。

参加者は、OB社員、家族を含めた六十四人。番組のように三十二曲を謡い、舞い、囃す充実した会になった。第一日の最後は全観世による素謡「杜若」でシテ新井純さん、ワキ浅井昇さんであった。第二日は服部幸さんをはじめとする在京社員の夫人グループが参加して「千手」を謡った。

今回の会社補助は特別の配慮で五十万円を受けた。そのうちの半分を記念誌印刷代にあて、残りが交通費(後に補助対象から外される)・会場費・番組印刷費などの補助であった。記念誌は二百部作り、会員に一冊千円で頒布した。

注 番組は印刷後の変更を修正してありません。

平成四年十一月七、八日 開演午後一時始

### 第三十一回 協和うとう会番組

於 知立 弘法山 遍照院

(第一日目)

素謡

(富・室)

加 茂

シテ中里宜紫  
ワレ鈴木正美  
ワキ近藤 明

(界・大)

小 督

トモ武居泰生  
ワレ藤沢 佐都子  
シテ佐藤 護  
ワキ木滝 彰一

(防府)

善 知 鳥

ツレ内田和子  
シテ加来佐吉  
ワキ原田博彰

田 村

山山野 順三  
上森家 多喜男  
勝又 菊枝  
島森 登美代  
望月 美江

鉢 ノ

木

勝又 菊枝  
島森 登美代  
望月 美江

枕 之 段

浜田 主一郎  
山田 紳一郎  
三岸古 谷正 雄二

天 鼓  
網武土仁  
野居居木  
正泰銳  
美生一車

(本・観) 高野物狂  
子大森村大忠亮  
シテ野村大忠亮  
ワキ但見晴啓

(大阪) 景清  
上七藤井武夫  
ツレ菊守悦三  
シテ齋藤弘三  
ワキ瀬島常雄

井 筒 独 吟  
三池公忠  
松 虫 水滝彰一  
玉 之 段 木谷正敦  
連 吟

小 督 鈴木正直  
藤田良輔

(富・宝) 土 蜘蛛  
シテ矢尾幸三  
シテ大橋良作  
ワキ島田純一

(観世合同) 杜 若  
シテ新井純  
ワキ浅井昇  
第一日目終了予定午後六時

(第二日目)

(塚) 三 輪  
シテ山田義之  
ワキ山口整次

(本・観) 土 蜘蛛  
朝雄八尾島將  
シテ大森大睦夫  
ワキ田村直邦

(宇部) 山 姥  
ツレ三谷哲雄  
シテ岸田軍二  
ワキ古谷正勝

笠 之 段 独 吟  
岡平尾英明  
鉢 木 高橋孝夫  
三池公忠

笠 之 段 四日市一同  
多喜男  
天 鼓 高橋孝夫  
長倉久子

花 月 仕 舞  
水原圭子  
實 盛 富岡啓太郎  
藤 戶 西村淳

(四日市) 船 弁 慶  
子山野順三  
シテ上森茂  
ワキ西野邦明  
ワキツレ山家多喜男

(OB夫人) 千 手  
フレ服部幸子  
シテ河盛迪子  
ワキ小池方子

(宝生合同) 咸 陽 宮  
大臣鐵治義延  
ツレ大橋良正  
シテ寺西正行  
ワキ松本春正  
泰舞陽高井春樹

清 經 木谷芙美枝  
大富岡啓太郎  
平尾学

吉野天人 内田和子  
磯部武夫 西村藤  
磯部武夫 近藤明  
磯部武夫 近藤明  
磯部武夫 平尾学

附 祝 言

(終了予定午後二時頃)

第32回  
平成5年  
(1993)

# 神前で謡い舞う 椿大社に熱演を奉納

第21回以来の神社での開催となつた。毎年の会場探しなどの世話役を務めている四日市グループが、いわばお膝元の格好の会場として椿大社(おおよしろ)を選んだことは自然な流れだったといえる。ところが、さらに四日市工場にこの氏子さんである辻忠和さんがおられたのである。辻さんのお骨折りもあつて会場使用については、いろいろと好意的にしていた。辻さんには夜の懇親会に清酒を差し入れていただいたうえに、会場からは「千円未満は切り捨てさせていただきます」というご配慮を頂戴するほどに「顔」がきいていた。「熱演奉納」のご利益であつた。

参加者は四十八人で例年よりごちんまりしたが、地元四日市グループからは新人小畑(現大島)真子さんを含む十一人が参加した。小畑さんは仕舞で「羽衣」を舞つた。参加人数は少なかつたが、番組のとおり、素謡十三番をはじめ、独吟・連吟・仕舞・独鼓・一管・一調・舞囃

子と例年に変わらぬ内容であつた。

第一日は全観世の素謡「野宮」(シテ西村淳さん、ワキ富岡啓太郎さん)、第二日は全宝生の素謡「三井寺」(シテ平尾學さん、子方長倉久子さん、ワキ鈴木正美さん、ワキツレ近藤明さん)で締めくくつた。

二日間を総括する打ち上げは、恒例の三本締めにて代えてご神前での「二礼二拍一礼」で締めた。

後日、月刊誌「観世」(檜書店発行)に、この会の写真二枚を添えて「協和うとう会」の紹介記事を寄稿することになった。土浦市で開かれた謡曲の会で、富岡啓太郎さんが檜書店の方とお会いしたことがその発端であつた。その原稿の「執筆指令」が事務局の安嶋将に下り、次ページのような記事となつた。そして、この記事が翌年の能舞台でのうとう会開催へとつながつたのであつた。

平成五年十一月十三日(土)・十四日(日)

## 第三十二回 協和うとう会番組

於 三重県 椿 大 社

(第一日) 開演午後一時始

(本・観)

高 砂

素 謡

フレ八尾和正  
シテ鈴木直

ワキ但見靖啓

(大)

大 仏 供 養

独 吟

子大倉博  
フレ藤沢佐都子  
立兼仁木卓  
前シテ藤井武夫  
後シテ武居泰生

ワキ土居鋭一

(當) 玉

葛 三池公忠

(堺) 松

虫 山田義之

(大) 女 郎

花 菊守悦三

(四) 天

鼓 山家多喜男

(本) 笠 之

段 安島将

(大) 鞍 馬 天 狗

連 吟 上仁木鋭一  
口 藤居純

(大) 江

加藤佐都子  
藤弥生子

(當・宝)

橋 弁 慶

子矢尾幸三  
シテ島田純一  
フレ中里宜資

(四) 羽

仕 舞 小畑真子

『観世』誌 平成六年二月  
号掲載記事

「協和うとう会」

三十二年の歴史刻む

協和発酵工業㈱の現役社員・OB、そしてその家族の謡仲間が東は茨城、西は福岡から、毎年一回、七、八十人集う「協和うとう会」は、平成五年で32回を重ねました。昭和35年7月に発足して以来、観世流・宝生流合同で運営してきました。

当初は一日だけの会でしたが、第12回以来二日間にわたる開催となり、これだけの規模で宿泊つきの会場探しが大変です。参加者が前記のほか東京・静岡・愛知・三重・大阪・京都・山口からきますので、特別なことがない限り中部・関西地区に会場を求めることにしています。たとえば、奈良・薬師寺、滋賀・三井寺法泉院、静岡・可垂斎、滋賀・多賀大社、三重・椿大社などのお寺や神社、または、各地の国民宿舎で催してきました。平成元年は、会の創設者の一人である水原一瓢さん(宝生流能楽師・会社OB)が、自宅に能

舞台(大和六瓢能舞台)を造られたことから神奈川県での開催となりました。

二十周年と三十周年の記念大会時には、記念誌「うとう」を発行して、会の歴史や全会員の近況紹介を行っています。ちなみに「うとう」は、謡う、打とう、にかけたもので、謡曲「善知鳥」と同じ発音です。

会の模様は、素謡に始まり独吟・連吟・仕舞・独鼓一管・一調・連調・舞囃子・番囃子と、二日間にわたり熱演が続きます。初日の夜は、懇親会と甲合せでこれまた盛り上がります。

囃子の方も笛・鼓・大鼓(おおかわ)・太鼓と会貞の中で揃います。観世・宝生合同ですの、囃子方は二番続いたり、次に素謡の役や地頭が続くといったことも珍しくありません。

また、会員と会員以外の社員に能面を打つ人がいて、会場に完成した作品のほか制作途中のものを持ち込んで、展示してくれたりしています。しかし、残念ながら、その面をかけて舞った会員はまだおりません。会員の中で、能舞台・能面・囃子方が揃うわけですから、これを会の一つの誇として、精進を続けています。

(宇) 俊

(四)鶴 亀  
(塚)程 々  
(四)笠 之  
段 々  
山 上  
家 田  
多 森  
喜 義  
男 之  
茂

寛

及古谷正勝  
山吉岡征一  
シテ岸田軍二  
ワキ三谷哲雄

(塚) 蟬

丸 独  
山 山  
口 部  
整 武  
次 夫  
之

(息)加藤弥生子

(四) 七 狸

騎 落

子 上 森  
フレ 佐 恒 治  
矢 木 宝 一郎  
シテ綱野正実

ワキ山野順三

シテ吉岡征一  
ワキ浜田紳一郎

(宝) 田

村 連  
シテ西村淳  
ワキ高山尾健一郎

(親世合同) 野 宮

シテ西村淳  
ワキ富岡啓太郎

第一日終了予定午後六時

(第二日)

(土) 土 兼  
(本・親) 蜘蛛

平 蛛

素 謡  
トキ飯島重次  
明松尾英毅  
願久保伸寛  
シテ木葉正祐  
ワキ笹井義晴

(本) 望  
月 西村富岡啓太郎

一 管  
シテ大森大陸  
ワキ藤田良輔

(四) 夕顔

シテ木谷正教  
管 富岡啓太郎  
ワキ水野学

(抄)花 月 独吟  
原田博彰

(富)融 大橋良作

(四)隅 川 浅井昇

(大)花 田 磯部武夫

一 篋 調 磯部武夫

(本)屋 島 富岡啓太郎 磯部武夫

(本)野 仕 舞 西村洋

(本)半 蔀 富岡啓太郎

(塚) 玄象

舞 山口登次  
シテ水滝彰一  
ワキ山田義之

(宇) 弱法師

シテ花田有紀子  
ワキ古谷正勝

(宝) 紅葉狩

舞 美枝  
富岡啓太郎  
平尾学

(四) 小督

木谷美枝  
富岡啓太郎  
平尾学

(宝合同)

三井寺

シテ平尾学  
ワキ鈴木正美  
チ長倉久子  
ワキ近藤明

附 祝 言

(終了予定午後二時頃)

第33回 平成6年 (1994)

能舞台の後は保津川下り  
うとう声 紅葉の紅もさかななり

この年四月下旬発信の開催案内に「昨年とう会の後すぐに今年の会場探しに入り、めざす醍醐荘が結婚シーズンで無理とわかり、さて…、と思つているところに磯部さんが『観世』に掲載された協和とう会の記事を鼓の先生(久田舞一郎師)にお話ししたことからトントンと話が展開し、めつたに使えない会場で…」とある。名前のとおり大本教の総本山であり、能舞台が二つもあつて、とう会は奥まつた別館の大広間の舞台を借用できた。大本教の研修生という形で舞台使用・宿泊するため、二日目の朝は全員が大講堂で毎朝行われる「お勤め」を信者の方々と一緒に終えてから朝食をとつた。

外界との関係をまったく断つたような会場で、全観世の番囃子「小督」のほか、素謡十三番、舞囃子・仕舞・連吟など例年のとおりの賑わいであつた。

今回は当日になつて体調不良などで教人の欠席者が出たが、前回より多い五十六人の参加になつた。しかし、参加グループは宇部・防府・大阪・堺・四日市・富士・本社・土浦で、事業場の謡曲部がすべてそろつた。

これまでの番組は活版印刷ですべて外注であつたが、今回は磯部さんがワープロ自宅作業で印刷原稿を作り、その印刷だけを外注して経費節減をはかつた。また、この本格造りの舞台ならではのエピソードもあつた。切戸口の引き戸が長年の使用のためその敷居とともに相当に磨り減つており、開け閉めがたいへん重かつた。私(安嶋)が洗面具に石鹸を入れていたのを思い出し、それを摺り込むように塗つて大分軽くなつた。しかし開け閉めする進行係の杉山喜好さん(防府)には「苦勞をかけた。

亀岡からの帰路は、紅葉の保津川沿いにトロッコ列車で嵐山まで下つた。これも磯部さんのご尽力により、この観光シーズンに希望者四十八人の指定席が確保できた。車窓から眼下の急

確保できた。車窓から眼下の急

流を下る舟に歓声を挙げながら「保津川下り」を楽しんだ。見出しの「うとう声紅葉の紅もさかんなり」は、謡仲間望月美江さん(富士グループ)が三島市から打ってくださった祝電の一節であった。

第三十三回

協和うとう会番組

(第一日目) 開演 十二時三十分  
 平成六年十一月十二、十三日  
 於 亀岡 大本 春陽殿

住吉詣

(本観)

子 田村 直邦  
 惟光 大森 大陸  
 光源氏 八尾 和廣  
 ツレ 但見 靖彦  
 シテ 田辺 博章  
 ツレ(母) 木暮 正祐  
 ツレ(五郎) 飯島 重治  
 シテ 松尾 英毅  
 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生  
 素 菅井 義晴  
 須藤 忠紀  
 菊守 悦造  
 藤井 武夫  
 安島 将  
 藤田 良輔  
 鈴木 正美  
 近藤 明  
 藤沢 佐都子  
 加藤 弥生子  
 竹林 実  
 板村 政雄

小袖曾我

(土浦)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

邯鄲

(大阪)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生  
 連 吟 菅井 義晴  
 須藤 忠紀  
 菊守 悦造  
 藤井 武夫  
 安島 将  
 藤田 良輔  
 鈴木 正美  
 近藤 明  
 藤沢 佐都子  
 加藤 弥生子  
 竹林 実  
 板村 政雄

竹生島

(土浦)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

三井寺

(大阪)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

蟬丸

(本観)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

鐘之段

(宝生)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

大原御幸

(大阪)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

融

(防府)

子 藤沢 佐都子  
 シテ 武居 泰生

船橋

(四日市)

ツレ 木谷 正敦  
 シテ 浅井 昇  
 素 菅井 義晴  
 須藤 忠紀  
 菊守 悦造  
 藤井 武夫  
 安島 将  
 藤田 良輔  
 鈴木 正美  
 近藤 明  
 藤沢 佐都子  
 加藤 弥生子  
 竹林 実  
 板村 政雄

鶯之段

(富観)

子 三池 公忠  
 班 木野 邦器  
 女 邦器

山姥

(宝生)

子 高橋 孝夫  
 山 大橋 良作

砦

(宝生)

子 森脇 亮

羽衣

(四日市)

子 山家 多喜男  
 羽 浅井 昇  
 独 津崎 展子

富士太鼓

(大阪)

子 磯部 武夫  
 富 加藤 弥生子

勤進帳

(四日市)

子 浅井 昇  
 勤 上森 茂  
 一 山家 多喜男  
 磯部 武夫

雨月

(宇部)

ツレ 吉岡 征一  
 シテ 岸田 軍二  
 素 菅井 義晴  
 須藤 忠紀  
 菊守 悦造  
 藤井 武夫  
 安島 将  
 藤田 良輔  
 鈴木 正美  
 近藤 明  
 藤沢 佐都子  
 加藤 弥生子  
 竹林 実  
 板村 政雄

葵上

(本観)

ツレ 八尾 和廣  
 シテ 藤田 良輔  
 素 菅井 義晴  
 須藤 忠紀  
 菊守 悦造  
 藤井 武夫  
 安島 将  
 藤田 良輔  
 鈴木 正美  
 近藤 明  
 藤沢 佐都子  
 加藤 弥生子  
 竹林 実  
 板村 政雄

大江山

(本)

子 西村 淳

松虫

(宇)

子 花田 有紀子

巻絹

(宇)

子 永岡 重信

笹之段 (防府) 内田 和子

玄象

師 木野 邦器 誦 政雄 勇治  
ツレ 板村 古賀

土蜘蛛 (宝生)

シテ 中里 宜實 幸三  
頼光 八尾 博子  
ツレ 胡蝶 野村 久子  
長倉

ワキ 竹林 実  
ワキ 大橋 良作

(第二日目) 開演 午前九時予定

巻絹 (塚)

素 誦 謹  
ツレ 佐藤 影一  
シテ 水滝

ワキ 山口 整次

井筒 (宝生)

弱法師 (宝生)

竹生島 (本観)

長倉 久子  
高橋 孝夫  
平尾 学  
高山 健一郎  
西野 邦明  
巽 俊一  
田村 直邦

ツレ シテ

素 誦 謹  
内田 和子  
重村 節子

ワキ 浜田 伸一郎  
ワキ ツレ 有本 勝

仕 森脇 亮

頼政 (富観)

通小町 (防府)

頼政 (富観)

富岡 啓太郎

素 誦 謹

トモ 山家 多喜男  
胡蝶 津崎 展子  
シテ 山野 順三  
綱野 正美

ワキ 上森 茂

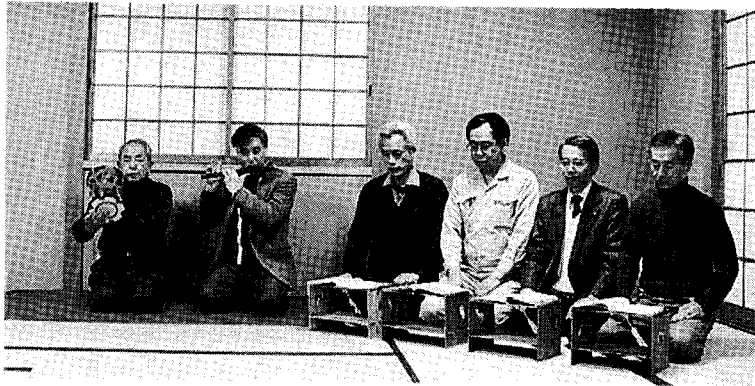
土蜘蛛 (四日市)

わが謡曲部 稽古風景

細く長くやっています

堺工場謡曲部

堺工場謡曲部として「協和とう会」に参加したのは、昭和四十三年の第7回からである。



その後数回の不参加があるものの、福島得先生(故人)、現在は磯部武夫先生のご指導のもと、部としての活動を続けている。お稽古は、毎週木曜日、社員クラブ「うりの荘」で行っており、写真は、左から磯部武夫先生(小鼓)、村上静男さん(元宇部工場、現千代田開発、笛)、網野政美・水滝彰一・山田義之さん、そして藤井武夫さんである。村上さんは、笛のお稽古のために最近より参加いただいております。氏の笛に対する熱心さには他の一同大いに影響を受けている。写真の稽古風景は、近々こうありたいという願望が込められたものである。

磯部先生からは、情景や登場人物に合わせた謡、また謡の拍子・テンポについて何時も注意をされるが、なにせ予習復習どころか、お稽古の参加もままならない面々にとつて、ひたすら棒読みのうたいが常である。

部としては、細々とした活動ではあるが、それだけ息長く、秋の「とう会」と春の「中謡会(一昨年二十周年を迎えた)」には、(たとえ練習不足ではあろうとも)参加し続けようとひそかに決意をしている次第である。(水滝彰一)

草(宝生)洗 舞 舞 子  
望月 美江 岡田 英明  
三池 公忠 平尾 学

小 (全親世) 督  
トモ山田 義之 番 雛 子  
ツレ木野 邦器  
シテ安島 将 ワキ 水滝 彰一  
富岡啓太郎 磯部 武夫 平尾 学

俊 寛 (全宝生)  
シテ 平尾 学  
泰 近藤 正美  
成 鈴木 明  
ツレ(伴舞) 富岡 啓太郎  
ツレ(伴舞) 西村 淳  
シテ 新井 純

三 笑 (本親)  
附祝言

第34回 平成7年 (1995)

「養老」ゆかりの地で  
故水原一瓢さんを偲ぶ

この年二月、協和うとう会の重鎮の一人である水原一瓢さんが亡くなられた。このため、今回の会場には「六瓢能舞台」も候補にあがったが、四月に交誼会(協和うとう会関東版)をここで「水原一瓢師追善」の会を開いたことほかの事情から、地理的条件などを考慮した通常の会場探して謡曲ゆかりの「養老」

の地となった。グリーンハイツの地となった。グリーンハイツ養老は「国民年金保養センター」の一つで、年金受給者は宿泊料が割引されるといいうれしい施設であった。参加者は五十一人であった。水原一瓢さんを追悼する曲が全宝生の素謡「鶉飼」をはじめ「清経」「玉葛」「井筒」「融」などを謡い、懇親会では

水原夫人の圭子さんのお話しもいただき、謡仲間であり師でもあった水原さんを偲んだ。

「ご当地の「養老」は、第一日の最初に本社観世グループがシテ但見靖啓さん、ツレ藤田良輔さん、ワキ八尾和廣さんと謡った。よく働く孝行息子が山中で酒の泉を見つけそれを汲んで帰って酒好きの老父を養ったという伝説の「養老の滝」が会場から近く、朝の散歩がてら行つて来たという人もいた。ただし、閉会後に養老駅までのタクシー乗って「養老の滝を見たので

回つてくれませんか」と頼んだところ、行楽シーズンとあつて滝への道路が渋滞しており「養老の滝を見たいなら平日に来なさい」と笑われ「幻の滝」となつた。

今回の会計報告には、「昨年は五万円ほど剰余金を出したので、今年は配付する写真代を会の会計でまかない、若干の赤字(約五千円)にした」とあり、開催地に近い事業場から毎回のように入れたく自社酒類の差し入れが、会社補助とともに会の財政上たいへんありがたかつた。

協和うとう会番組

第三十四回 (第一日目) 開演 午後一時  
平成七年十一月十一、十二日 於 岐阜グリーンハイツ養老

(本親) 養 老 ツレ 藤田 良輔  
シテ 但見 靖啓 ワキ 八尾 和廣  
(防府) 清 経 ツレ 重村 節子  
シテ 浜田 伸一郎 ワキ 内田 和子  
(宝生) 玉 葛 シテ 平尾 学 ワキ 近藤 明  
(大阪) 花 筐 ツレ 藤沢 佐都子  
シテ 加藤 弥生子 ワキ 藪下 尚夫  
ワキツレ 藤井 武夫  
頼 政 吟 木谷 正教



熊野  
草子洗小町  
連  
田辺 博章  
三池 公惠

鶺鴒之段  
中里 宜資  
矢尾 幸三

班女  
古賀 勇治  
竹林 実

駒之段  
西野 邦明  
八尾 和廣

小督 (四日市)  
トモ 浅野由史江  
ツレ 津崎 辰子  
シテ 山野 順三  
ワキ 網野 正美

紅葉狩 (宝生)  
シテ ツレ 長倉 久子  
野村 博子  
ワキ 矢尾 幸三  
ワキツレ 中里宜資

草子洗小町  
連  
吟

井筒  
重村 節子  
内田 和子  
唐本佳代子

松風  
長倉 久子  
高橋 孝夫

百萬  
大橋 良作  
近藤 明

笠之段  
藤井 武夫  
門林 末男  
武居 泰生  
義之 馨

正尊 (全觀世)  
子 内田 和子  
姉和 田辺 博章  
義経 岸田 軍二  
シテ 磯部 武夫  
平尾 学  
高山健一郎

起請文  
ワキ 安島 将

(第二日目) 開演 午前八時三十分

素素 謡

通小町 (四日市)  
ツレ 上森 茂  
シテ 山家多喜男  
ワキ 浅井 昇

紅葉狩 (土浦)  
ツレ 須藤 忠紀  
シテ 松尾 英毅  
ワキ 笹井 義晴

屋島  
藤田 良輔

四季  
富岡啓太郎

仕盛  
永岡 重信

敦衣  
唐本佳代子

羽筒  
内田 和子

井院  
花田有紀子

雲林  
子

清經  
富岡啓太郎  
加藤弥生子

風  
ツレ 古賀 勇治  
シテ 瀬島 常雄  
ワキ 竹林 実

山姥  
高橋 孝夫  
調 近藤 明

松虫  
富岡啓太郎  
磯部 武夫

玉葛  
水原 圭子  
森脇 亮

三井寺 (宇部)  
子 花田有紀子  
シテ 岸田 軍二  
ワキ 永岡 重信  
ワキツレ 古谷 正勝

善知鳥 (堺)  
ツレ 山田 義之  
シテ 山口 整次  
ワキ 水池 彰一

鶺鴒  
衣 大橋 良作  
子 富岡啓太郎  
三池 公惠  
近藤 学

鶺鴒飼 (全宝生)  
シテ 鍛冶 義延  
ワキ 松本 正  
ワキツレ 河盛 幹雄

附祝言

(終了予定午後二時三十分)

第 35 回  
平成8年  
(1996)

35年で新時代へ

初の狂言謡と親子共演が実現

会場は四日市グループのお膝元の一つで、「厚生年金 ハートピア長島」が正式名称。木曾川と長良川に挟まれた立地で、いわゆる長島温泉より上流に位置するがここにも温泉が湧き神経痛・腰痛・肩こりなどに効能

まで一手にやってこられた磯部武夫さんの技術がますます向上して、印刷屋が楷書体の活字で組んだものと全く区別がつかない出来映えの番組になった。四十番を超える会の内容は番組のとおりであるが、うとう会初めの狂言謡「小舞」が西村淳さん(本社)の精進によって演じられた。このために本社グループの面々に前もって特訓が行われていた。

加・共演が二組もあった。富士グループの三池公恵・曜子さん母子、防府グループの木野邦器・咲百合さん父子で、これまでに何組かあった夫婦参加の幅を広げ、うたい文句の「協和の現役・OB・家族の謡仲間が集う」協和うとう会ならではのことであった。

舞台は施設の一番奥の大広間であったが、一般の滞在客がその音声に誘われてお連れとともに聞き入ってくれた。

第三十五回

協和うとう会番組

平成八年十一月十六日(土) 十七日(日)  
於 三重県長島町 厚生年金ハートピア長島

(第一日目)

草子洗小町  
(四日市)

立子 谷崎 純子  
實之 上野 茂  
シテ 津崎 政美 展子  
ワキ 山野 順三

東 北  
(本社)

シテ 田村 直邦  
ワキ 但見 靖啓

鶴 亀  
(防府)

シテ 木野 咲百合  
ワキ 内田 和子

隅田川 平敏治 義延  
高 山 健一郎  
竹 林 常雄  
古 賀 弥生子  
瀬 島 佐都子  
加 藤 整次  
山 口 義彰  
山 田 義一  
景 清

歌 占

船弁慶  
(土浦)

子 シテ 西野 邦明  
シテ 松尾 英敏  
ワキ 田辺 博章  
シテ 須藤 忠紀

定 家  
(宇都)

シテ 花田 有紀子  
ワキ 岸田 軍二

善 知 鳥  
(防府)

ツレ 内田 和子  
シテ 島田 活志  
ワキ 竹林 実

山 姥

高橋 孝夫  
大橋 良作  
三池 公恵

枕の段

平尾 学  
中里 宜資

山 姥

富岡啓太郎  
三池 曜子  
丸山 和美

羽衣  
クセ

高橋・大橋  
近藤・矢尾  
三池 曜子  
丸山 和美

鞍馬天狗  
(富士)

子 シテ 中里 博子  
シテ 野村 宜資  
ワキ 矢尾 幸三

松 風  
(全親世)

ツレ 浅井 昇  
シテ 森脇 亮  
ワキ 磯部 武夫

(第二日目) 開演 午前九時

放下僧 (宇部) ツレ 西本 徳之 正勝 ワキ 永岡 重信

鉄輪 (四日市) 狂言 謡 シテ 木谷 正敦 ワキ 浅井 恒治

宇治の騒 吟 西村 淳

木賊 磯部 武夫

養老 安島 将

通盛 上森 茂

野官 田辺 博章

実盛 山家 多喜男

柳の下 小 舞 西村 淳

笠之段 政 野村 博子

笠之段 花田 和子

放下僧 小歌 西本 徳之

通小町 (大阪・堺) ツレ 山田 義之 尚夫 ワキ 山口 整次

第36回 平成9年 (1997) アクシデント続発でごごんまり 孫?との共演など内容充実

うとう会を一カ月足らず後に控えた十月、素謡「百萬」のシテで参加することになっていた土浦グループの笹井義晴さんが、工場前を走る夜の道路で交通事故にあい帰らぬ人となった。すでに番組が出来上っておりその

まま記載されているが、当日ワキを務めるはずだった須藤恵紀さんが独吟に切り替えて涙に咽びながら謡った。さらに会の前日になって二人の欠席者が出るなどして、四十人のごごんまりした会になってしまった。

阿清 永岡 重信 野宮 森脇 亮 富岡 啓太郎

船弁慶 (全宝生) シテ 高橋 孝夫 ワキ 矢尾 幸三

野宮 (本社) シテ 八尾 和博 ワキ 大森 大陸

乱 菅 淳

弱法師 西村 淳 (小)磯部 武夫

班女 富岡 加藤 啓太郎 弥生子 平尾 学

安宅 (勸進帳) 同山 木野咲百合 三池 啓太郎 平尾 学

附祝言 (防府) 同山 木野咲百合 三池 啓太郎 平尾 学

前回に続いて小学六年生の木野咲百合さん(防府)が参加、素謡「羽衣」のシテと「隅田川」の子方をしっかりと謡い、喝采を浴びた。「羽衣」は役も地謡も女性だけで謡ったので、咲百合さんから見るとあたかもお姉さん、お母さん、おばさん、おばあちゃんといふ感じになり、ほほえましい一番であった。西村淳さん(本社)も前回の

狂言初上演に続いて狂言小舞「七つ子」を披露した。地元蒲郡市にお住まいの協和OB尾崎行夫さんが奥様同伴で聞きに来てくださり、お祝いもいただいた。防府工場時代からの知り合いの方も多く、何十年ぶりのご対面であった。また、尾崎さんは蒲郡の親戚が経営するホテルで総務部長をしておられ、そこでのうとう会開催の可

能性を検討していただいたが実現には至らなかつた。  
なお、今回をもって長年うとう会事務局をあげてきた私(安嶋)が翌年1月末で定年にな

ることから、後任を田辺博章さん(当時土浦工場にお願ひすることにして、打ち上げの席上で一同の了解を得た。

第三十六回

協和うとう会番組

(第一日)

素 謡

開演 十二時半

平成九年十一月十五日(土)十六日(日)  
於 愛知県蒲郡市三谷町南山一七六  
サ ルズ 三三河 湾

清 經 (四日市)

ツレ 上森 茂  
シテ 山野 順三

ワキ 綱野 政美

蝉 丸 (防府)

ツレ 浜田 伸一郎  
シテ 重村 節子

ワキ 杉山 喜好

羽 衣 (富士)

シテ 野村 博子  
(キリ) 唯子入 小

ワキ 加藤 恵理  
近藤 明

楊 貴妃 (坂)

シテ 山田 義之

ワキ 水滝 彰一

駒之段 (富士)

三池 公恵

(小) 三池 曜子

鶴 (富士)

キリ

高橋 孝夫

(太) 近藤 明

水波之伝 (本社)

一

菅

西村 淳

鐘之段 (富士)

近藤 孝夫  
高橋 孝夫  
平尾 孝夫

三池 曜子  
大橋 良作  
富岡 啓太郎

山 姥 (全観世)

ツレ 富岡啓太郎  
シテ 西村 淳

ワキ 森脇 亮

天 鼓 (本社)

シテ 藤田 良輔

ワキ 八尾 和廣

藤 戸 (宇部)

シテ 岸田 軍二

ワキ 古谷 正勝  
ツレ 西本 徳之

羽 衣 (防府)

シテ 木野咲百合

ワキ 内田 和子

七つ子 (本社)

狂言 小舞

西村 淳

(第二日)

開演 午前八時半

橋 弁慶 (本社)

子 八尾 和廣  
トモ 但見 晴啓  
シテ 細見 浩司

ワキ 木谷 美枝

葵 上 (全女性)

ツレ 内田 和子  
シテ 加藤 弥生子  
藤沢 和子

ワキ 木谷 美枝

通 盛 (四日市)

ツレ 山家多喜男  
シテ 佐藤 恒治

ワキ 木谷 正敦

桜 川

独 吟

(富士) 高橋 孝夫

弓 之 段

久 島

(四日市) 浅井 昇

屋 久

島 久

(防府) 森脇 亮

求 塚

塚 連 吟

(宝生) 平尾 健一  
高山 健一

杜 若

独 調

(太) 西村 淳

第37回  
平成10年  
(1998)

琵琶湖を望む大津の会場  
念願の竹生島詣も実現

会場の住所が「唐橋町」のとおり、「瀬田の唐橋」から琵琶湖に注ぐ瀬田川のほとりでのとう会となった。参加グループは、北は土浦から南は防府までの謡仲間であったが、総勢四十人となった。

琵琶湖といえは謡曲「竹生島」とあって、富士宝生グループの素謡がトップを飾った。また「三井寺」もご当地番組で防府グループが二日目に素謡を謡った。

会場には知立市の第31回に自作の能面や面打ち道具などを持ち込んで紹介してくれた名古屋

仕 舞

熊

野

博章

柳

野

博章

天

鼓

博章

胡蝶

居

子

胡蝶

舞 舞 子

(大) 富岡啓太郎 (小) 三池 公恵 (太) 近藤 平尾 学明

紅葉狩

内田 和子

(大) 富岡啓太郎 (小) 加藤弥生子 (笛) 平尾 学

井 筒

木谷美枝

(大) 富岡啓太郎 (小) 磯部 武夫 (笛) 西村 淳

百 萬

子 西野 邦明

シテ 笹井 義晴

(土浦)

ワキ 須藤 恵紀

隅 田 川

子 木野咲百合

シテ 瀬島 常雄

(防府)

ワキ 杉山 喜好

シテ 浜田 伸一郎

猩 々

シテ 高橋 孝夫

ワキ 平尾 学

(全宝生)

(終了予定 十四時頃)  
(解散予定 十五時頃)

支社の田中源司さんの遺作がいくつか掛けられた。田中さんは少し前に現役のまま病魔に倒れたのであった。

番組では、三池公恵・曜子さんの親子共演のほか、西村淳・道子夫妻が独吟独調で「菊慈童」を上演し、夫婦参加が珍しいくないとう会でも稀な共演で仲睦まじいところを披露した。

会場のすぐ近くには「源氏供養」の舞台、紫式部ゆかりの石

山寺があり、二日目の早朝の間を利用して訪れたり、打ち上げ後にゆつくり楽しむグループもあった。さらに、会場にもう一泊して、翌日は船で竹生島詣でしたグループもあった。

また会場の近くには、かつてはとう会に参加していたOBの安近毅さんがお住まいで、一日目の夜に駆けつけくださり、何十年ぶりの対面という人もあった。

第三十七回

協和とう会番組

平成十年十一月二十一日(土)二十三日(日)  
於 滋賀県大津市唐橋町二十三番三  
滋賀県青年会館  
TEL 0775-13712753  
FAX 0775-13712756

(第一日)

竹生島

素 謡  
シテ 矢尾 孝三(欠) 近藤明  
ツレ 加藤 恵理

ワキ 森田 英基

草子洗小町

子 内田 和子  
立衆 竹林 実  
ツレ 浜田 伸一郎  
シテ 藤井 祥孝

ワキ 加来 佐吉

善知鳥

ツレ 西野 邦明  
シテ 松尾 英毅

ワキ 須藤 恵紀

放下僧

ツレ 山家多喜男  
シテ 佐藤 恒治

ワキ 浅井 昇

(四日市)

山 姥

独 調  
富岡啓太郎

太鼓 西村 淳

蟬 丸

独 吟  
田辺 博章

頼政 (四日市) 山家多喜男

野宮 (本社) 安島 将

起請文 (大阪) 磯部 武夫

源氏供養 (親世) 西村 淳

田村 (親世) 田辺 博章

獅子 (本社) 笛三池 曜子

船弁慶 (宝生) 大 富岡啓太郎 小 三池 公惠

菊慈童 (本社) 独吟独調 西村 道子 太鼓 西村 淳

鶴亀 (土浦) シテ 曾田 道久

巴 (防府) シテ 島内田 稻穂 (終了予定 十七時四十分)

俊寛 (全観世) 成 山田 義之 廉 藤田 良輔 シテ 富岡啓太郎

安達原 (四日市) 素 菅 菅 (開演 九時)

景清 (堺) トモ 藤井 武夫 ツレ 加藤弥生子 シテ 水滝 彰一

三井寺 (防府) 子 内田 和子 シテ 古賀 勇治

聯之段 (四日市) 谷崎 純子 津野由 展子 浅野由 更江

田村 (防府) 瀬島 常雄 浜田 钟一郎

竹生島 (防府) 加来 佐吉 浜田 钟一郎

通小町 (宝生) 高橋 孝夫 平尾 学

獅子 (本社) 西村 淳

西王母 (宝生) 小 大 富岡啓太郎 小 三池 公惠

巴 (親世) 小 大 富岡啓太郎 加藤弥生子

羽衣 (親世) 舞 舞 子 内田 和子

松風 (本社) ツレ 藤田 良輔 シテ 但見 靖啓

紅葉狩 (全宝生) シテ 平尾 学 ツレ 加藤 惠理

附祝言 (終了予定 十三時半) (打上開始 十四時)

ワキ 大森 大陸

ワキ 近藤 明 (近藤明)

ワキ 矢尾 幸三

ワキ ツレ 森田 英基

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

ワキ 竹林 実

ワキ ツレ 浜田 钟一郎

富士を遠望する藤枝に  
門司から土浦までの謡仲間

今回の会場は上森茂さん(四日市グループ)の努力で決まった。建物は「エミナース」の名前が示すように丘の上に建つ眺望のよい近代建築で、国民年金健康センターであった。富士山が遠望できて、「羽衣」の三保の松原や次郎長の清水港などに近く、物語の多い駿河の国でのうとう会となった。

参加者は、西は門司から島田活志さん、北は土浦の松尾英毅・曾田道久・小林誠さんと、全国規模で四十五人であった。うとう会の歴史が長くなると、かつての謡仲間が全国あちこちにおられ、今回は藤沢市から高野(現永山)正子さん(元東研グループ)が家族旅行を兼ねての参

第三十八回

協和うとう会番組

第一日目

平成十一年十一月十三日(土)〜十四日(日)  
会場 藤枝エミナール  
藤枝市南駿河台六一一  
TEL 0541645117 17  
(午後一時間演) 時間厳守

鶉 (宝生)

飼

シツレ 中里 宜資  
シテ 矢野 幸三

ワキ 加藤 恵理

加で、独吟「葵上」を謡った。

また今回も夫婦で参加の西村淳・道子夫妻(本社グループ)は、全観世の素謡「安宅」のシテ(辨慶)と子方(義経)を務めた。その夜の懇親会では、家庭でも

「いかに淳」「御前に候」という場面があるのではないですか、などと話題にされた。

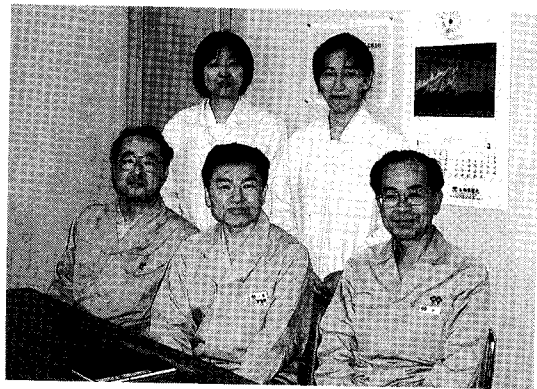
毎回のことであるが、磯部武夫さん(大阪グループ)が地謡の省略箇所を詳しく記した資料を作ってくださる。今回もその末尾に「地謡は、地頭の謡にしつかり合わせるように心掛け……お役の稽古以上に地謡のお稽古をして……」と地謡の心得を説いてあった。

わが謡曲部  
稽古風景

現役・OBが多彩な活動

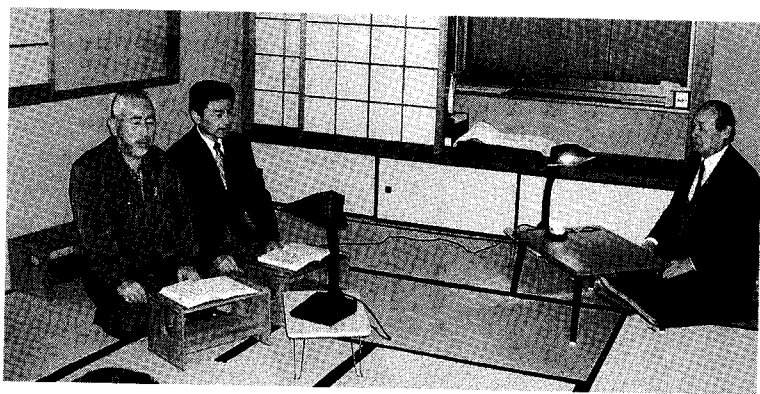
四日市工場謡曲部

四日市グループは名古屋を含むグループであり、春の中謡会、秋のうとう会に向け各自練習に励んでいます。工場謡曲部では、それぞれの会が近づくに研究所入口会議室で練習が始まり、さ



写真左から前列山野・上森・津崎さん

写真右から藤波先生、上森・山家さん



らに近づくに従業員クラブでの練習、浅井さん、山家さんを迎えておさらいをし、年二回の会に望むといった練習が常となっていました。ところが今回四十年記念誌原稿依頼を期に、緑さんが練習を再開され初心謡本

(字部)

実盛

(大阪・堺)

恋重荷

(防府)

玉鬘

田村

雲林院

班女

松虫

玉之段

羽衣

小袖曾我

俊寛

藤戸

駒之段

(本社)

通小町

(防府)

邯鄲

(四日市)

蝉丸

(全親世)

安宅

子

シテ

ツレ

ワキ

ツレ

シテ

ワキ

ツレ

シテ 西本 徳之  
ワキ 岸田 軍二  
ワキツレ 古谷 正勝

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

シテ 重村 節子  
ワキ 内田 和子

上から順番に練習しようという  
ことで、会に関係なく会議室利  
用率が急上昇中であります。四  
日市が誇る女性群(二名退職)  
も結婚により現在休止中。何と  
か新人をと考え、従業員を対象  
に四日市能鑑賞会を年一回企画  
し環境づくりに努めています、  
なかなか新メンバーの獲得には  
至っていません。  
その他、名古屋の木谷芙美枝  
さんは坂井音重先生に師事、稽  
古を続けておられるとともに、  
名誉師範として指導もされてい  
て、昨年から中謡会にはお弟子  
さんと一緒に参加いただき、

人数が減少気味であった中謡会  
が活気を取り戻しました。  
浅井・山家さん、上森は、藤  
波重和先生に昭和六十一年から  
師事、毎月一回先生の稽古と藤  
波涛光会のメンバーとして、三  
重県観世流謡曲大会などに参加  
山家さんは幸清流小鼓の稽古を  
再開され熱田能楽堂での発表会  
など多忙です。佐藤さんは名張  
で、水野さんも四日市の会に所  
属しそれぞれ練習に励んでおら  
れます。OBますます元気。工  
場謡曲部としては新メンバー獲  
得を目標に頑張っています。

第二日 目 (八時三十分開始)

雲林院

(四日市)

三井寺

(土浦)

小督

(大阪・堺)

獅子

花

西行

松

遊行

柳

弱法師

シテ 山家 多喜男  
ワキ 浅井 昇

子 西野 邦明  
シテ 松尾 英毅  
ワキ 曾田 道久  
ワキツレ 小林 誠

トモ 綱野 政美  
ツレ 加藤 弥生子  
シテ 田村 直邦

一 菅  
西村 淳

独吟・連吟  
田辺 博章

独吟・連吟  
藪下 尚夫

独吟・連吟  
安島 将

独吟・連吟  
浅井 昇

独吟・連吟  
高橋 孝夫



一 調  
駒之段 西村 淳  
雛子 磯部 武夫

梅 (字部) シテ 花田 有紀子 ワキ 永富 正人  
三池 未定 近藤 曜子

梅 (宝生)

經 (宝生) シテ 平尾 学 ワキ 中里 宜貴

附祝言

終了予定正午

第39回 平成12年 (2000) 六年振りの京都に36人 次回記念大会の構想練る

会場は第33回の亀岡市以来六年ぶりの京都府になった。今回も四日市グループがアンテナを張り巡らして探した所であった。今回も宇部グループが地元の先生の会とぶつかり不参加となった。このため参加者は三十六人となり、うとう会初期のころの規模になった。しかし、すごく熱心でタフな参加者がいた。所用のため第一日を欠席した富士グループの中里宜貴さんで、夜行バスを利用して早朝に会場へ駆けつけ、こ

の日二番目の素謡「鞍馬天狗」のワキを演じた。番組は第一日が全観世流の素謡「玄象」、第二日は全宝生の番囃子「狸々」で締めくくった。次回が第40回の記念大会になることから、打ち上げではそれが話題の中心になった。会場を故水原一瓢さんの「六瓢能舞台」を第一候補にして、十一月二十三・二十四日に開催する、出来るだけたくさんの方の参加を呼びかける、四十周年記念誌を発行することなどを確認した。

第三十九回

協和とう会番組

平成十二年十一月十八日(土)十九日(日)  
会場 京都厚生年金センター  
TEL 京都府京田辺市多々羅 0774-16213500

第一日目

(午後一時間演) 時間厳守

素謡

(防府) 大仏供養  
子 ツレ 浜田 伸一郎  
シテ 内田 和子 藤井 祥孝  
ワキ 加来 佐吉

(四日市) 籠  
シテ 山野 順三  
ワキ 上森 茂

(本社) 班 女  
シテ 藤田 良輔  
ワキ 八尾 和広  
ワキ ツレ 西野 邦明

独吟・連吟

笠之段 三池 公忠

鶯飼 浜田 伸一郎

大原御幸 ロンギ 田辺 博章

百萬 高橋 孝夫

紅葉狩 藤井 祥孝

独調

船弁慶 西村 啓太郎  
前後之替 西村 淳

連調

薪之段 大橋 良作  
中藤 宜理  
加藤 昭子  
三池 公忠

黒仕舞 森田 英基

歌占 宮岡 啓太郎

藤戸 (大阪・堺) シテ 瀬島 常雄 ワキ 水滝 彰一 藤井 武夫

半部 (全宝生) シテ 岡田 英明 ワキ 平尾 学

玄象 (全観世) 師 山家多喜男 加藤弥生子 磯部 武夫 シテ 磯部 武夫 ワキ 田辺 博章

第二日目 (八時三十分開始)

第一日目終了予定十七時半頃

経正 (土浦) シテ 小林 誠 ワキ 大森 大陸

鞍馬天狗 (富士) シテ 加藤 恵理 森田 英基 ワキ 中里 宜貴

巻絹 (大阪・堺) ツレ 綱野 政美 シテ 山田 義之 ワキ 田村 直邦

樂一 菅 西村 淳

願書 独吟 富岡 啓太郎 浅井 昇 安島 将

弱法師 孝夫 三池 公恵

小督 富岡啓太郎 西村 淳 野宮 富岡啓太郎 平尾 学

松虫 (四日市) シテ 佐藤 恒治 ワキ 山家多喜男

融 (防府) シテ 浜田 紳一郎 ワキ 竹林 実

安達原 (本社) シテ 但見 靖啓 ワキ 藤下 尚夫 大森 大陸

紅葉狩 内田 和子 富岡啓太郎 平尾 学

猩 (全宝生) 番囃子 中里 宜貴 森田 英基 富岡啓太郎 三池 公恵 三池 曜子 (下り地) 平尾 学

第40回 平成13年 (2001) 水原舞台で久々在京夫人も参加 40回記念大会盛り上がる

自ら「農学部の方が能楽師になつた変わり者」と称した故水原一瓢さんが、凝りに凝つて造つた六瓢能舞台は謡いやすい。うとう会としてのこの舞台は、第28回以来十二年ぶりである。参加人数は九十人から五十人と減つたが、二日間の熱演を天国の水原さんも楽しんでご覧になられたことであろう。番組のトップは素謡「鶴亀」で本社グループの新人、北河康

之さんがシテ、富田篤尚さんがワキでの初舞台であった。水原夫人の圭子さんが仕舞「東北」を舞つた。第一日を全観世の素謡「求塚」でしっかりと締めくくつた後、小田急線で町田市へ移動。宿舍のホテル町田ヴィラは、元東研グループの謡仲間で協和発酵から独立した松本正さんにお世話をいただいた。懇親パーティーを兼ねて四十周

年記念誌のための取材を参加者全員発言の形で行った。この内容を別掲の特集「うとう会40年」と「私の謡曲」にまとめた。  
 第二日には在京夫人グループも久し振りに参加してくださり、素謡「巻絹」を謡った。全宝生の素謡「富士太鼓」で二日間を謡いおさめた後、打ち上げに入

り、前夜のパーティーで残った取材の続きを行った。  
 取材の中では、思い思いに自分の謡曲への思い入れを語っていただいたが、うとう会創設から牽引車の役割を果たしてこられた方々の言葉には、長年の精進の結晶が滲んでいた。

### 第四十回 協和うとう会番組

平成十三年十一月二十三日(金)二十四日(土)

(第一日)

於 大和六瓢能舞台  
 開演 十二時半

鶴 龜

素 謡  
 シテ 北河 康之

ワキ 富田 篤尚

胡 蝶

シテ 加藤 恵理

ワキ 森田 英基

通 盛

ツレ 山野 順三  
 シテ 上森 茂

ワキ 浅井 昇

弱法師

独 吟  
 三池 公恵

船弁慶

中村 信郎

東 北

高山健一郎

藤 戸

田辺 博章

実 盛

(一語)  
 安嶋 将

松 風

連 吟  
 大森 靖大陸  
 但見 晴啓

竹生島

田辺 博章  
 西野 邦明

花 野 (大阪)

玉 葛 独 掛 高橋 孝夫  
 盤 涉 楽 一 管 西村 淳  
 筐 ツレ 加藤 弥生子  
 シテ 磯部 武夫  
 宮 シテ 野村 忠亮

ワキ 瀬島 常雄  
 マシレ 田村 直邦  
 ワキ 藤田 良輔

求 塚 (全観世)

鶴 龜 連 調  
 羽 衣 キリ  
 田 村 (仕) 榊 森田 英基  
 東 北 水原 圭子  
 実 盛 (キリ) 富岡啓太郎

ワキ 浅井 昇

賀 茂 (堺)

(第二日)  
 開演 午前九時  
 ツレ 網野 政美  
 シテ 水滝 彰一

ワキ 山田 義之  
 マシレ 藤井 武夫

小 督 (本社)

ツレ 渡辺 尚夫  
 シテ 松井 信行

ワキ 八尾 和広

熊 野 (富士)

シテ 大橋 良作  
 ツレ 矢尾 幸三

ワキ 中里 宜資

(終了予定 十七時頃)



↑「花筐」の加藤・磯部・瀬島・田村さん



附祝言

半 部  
(四日市)  
卷 絹  
(在京夫人)  
富士太鼓  
(全宝生)

シテ 鍛冶 藤延  
高山 健一郎

ツレ 河盛 迪子  
シテ 天野 美智子

ワキ 岡田 英明

ワキ 小池 方子

シテ 木谷 芙美枝

ウキ 山家 多喜男

船弁慶

(小) 加藤 弥生子  
(大) 富岡啓太郎

(笛) 高田 曜子

紅葉狩

(小) 三池 公恵  
(大) 岡田 英明

(笛) 高田 曜子

居 離 子

野 宮

木谷 芙美枝

(小) 山家 多喜男  
(大) 岡田 英明

(笛) 富岡啓太郎

帖

舞 舞 子

新井 純

独 吟

(終了予定  
解散予定  
十三時半頃  
十五時半頃)



↑全宝生の「富士太鼓」前列左から高山・鍛冶・岡田さん  
→上全観世の「求塚」役は左から木谷・西村・浅井さん  
→下「大和六瓢能舞台」で記念大会を盛り上げた全参加者



## わが謡曲部 稽古風景

現役社員はゼロに

### OB二人だけの

### 支社での楽しみ

#### 大阪支社謡曲部

大阪支社グループは今年七月に現役社員が転勤になったため、OBだけになりました。

昭和四十九年に私は定年を間近にして大阪支社へ転勤しました。その時、齋藤弘之さんから謡曲部をつくるから教えてほしい、と頼まれました。それ以来約三十年、人数は思い出せませんが、多くの方が謡曲を勉強されました。

その謡曲部が、一昨年に今村和郎さんが本社への転勤で、現役部員が田村直邦さん一人になりました。部員一名で部というのもおかしいので、大阪支社謡曲部は休部することとし、O

Bの瀬島常雄さんと同好三人の集まりとして、写真のように稽古を続けてきました。今年七月に田村さんが転勤になり、いよいよ現役で謡曲をする人はいなくなりました。

このような事情を土屋支社長にお話し、OB二人で稽古する場所を従来どおり使わせていただくことをお願いし、快くご承諾をいただきました。稽古というより、二人で謡って楽しんでいきます。それは別項の「私と謡曲」に書いたように、謡の上達法の第一は数多く謡うことで、それを実践しているわけです。

一番人数の多かった時は藤沢佐都子さんや加藤弥生子さんらがおられました。藤沢さんは宇部工場のメンバーでしたが、娘さん家族の転宅とともに大阪府泉南郡で同居され大阪のメンバーに加わりました。大阪支社までJRなど駅の階段が苦痛になり来られなくなりました。加藤さんは門司工場グループでうと

右から田村・瀬島・磯部さん  
円内は藤沢さん



で私と同じ先生の久田舜一郎師に習っておられます。

本社・支社では工場の人に比べて転勤の多く、その上営業関係の仕事では、定刻で進むことがまずありません。私も営業の時は「今日は先生の稽古日だから……」と心の準備をしていますが突然の来客などでダメになることがよくありました。私の場合は先生の稽古日が月火水の組と分かれていたので、臨時に異なる組の日をお願い出来、月二回の稽古はあまり欠かすことはありませんでした。

最近、何とか若い人を誘いたいと考えますが、誰に呼びかけ、話しかけたらよいのかわかりません。若い人が少なくなつたのは、会社の謡曲部だけではありません。私の先生の稽古場でも若い人はいません。

どうか皆さん、若い人を誘ってください。特に会社の現役の方に、くれぐれもお願い申し上げます。  
(磯部武夫)

## 協和うとう会 第1回～第40回の開催記録

回	開催年月日	会 場	参加者数	メ モ
1	S35. 7.17	静岡熱海・健保熱海荘	21	観世・宝生合同謡会
2	S36. 8.20	静岡修善寺・あさば旅館	17	
3	S37. 6.17	静岡熱海・健保熱海荘	25	
4	S38. 6.23	静岡熱海・健保熱梅荘	25	
5	S40.10.31	静岡熱梅・健保熱海荘	35	
6	S41.11.20	静岡熱海・つるやホテル	39	
7	S43.10.20	三重湯の山・四日市倉庫保養所	28	
8	S44.11.13	静岡網代・協和網代荘	35	
9	S45.10.18	静岡三島・佐野別邸	50	
10	S46.10.24	静岡浜松・西遠荘	60	
11	S47. 9.17	静岡三島・本山 妙法華寺	72	
12	S48. 9.15・16	静岡浜松・奥山半僧坊	64	
13	S49.10.19・20	静岡浜松・館山寺荘	74	
14	S50.10.18・19	大阪吹田・山手会館	84	宿泊:ニューナニワホテル
15	S51.11. 6・7	三重湯の山・希望荘	90	
16	S52.11. 5・6	滋賀三井寺・法泉院	87	
17	S53.11. 4・5	三重湯の山・希望荘	81	
18	S54.10.20・21	兵庫竜野・赤とんぼ在	77	
19	S55.11. 1・2	静岡袋井・可睡斎	84	
20	S56.11. 7・8	東京東北沢・清風クラブ	96	宿泊:晴光園
21	S57.10.16・17	滋賀犬上・多賀大社参集殿	70	
22	S58.11. 5・6	静岡袋井・醍醐荘	80	
23	S59.11. 3・4	静岡熱海・岩間荘	73	
24	S60.11. 2・3	兵庫神戸・須磨荘	60	
25	S61.11. 1・2	滋賀長浜・豊公荘	49	
26	S62.11. 7・8	兵庫相生・あいおい荘	60	
27	S63.11. 5・6	三重湯の山・希望在	69	
28	H元.11. 4・5	神奈川大和・六瓢能舞台	90	宿泊:さがみの
29	H2.11.10・11	奈良西ノ京・相宗大本山 薬師寺	80	
30	H3.11. 9・10	山口防府・渡辺舞台	74	宿泊:玉泉湖温泉
31	H4.11. 7・8	愛知知立・弘法山 遍照院	64	
32	H5.11.13・14	三重鈴鹿・椿大社	47	
33	H6.11.12・13	京都亀岡・大本本部春陽殿	56	
34	H7.11.11・12	岐阜養老・グリーンハイツ養老	51	
35	H8.11.16・17	三重長島・厚生年金ハートピア長島	49	
36	H9.11.15・16	愛知蒲郡・サンヒルズ三河湾	40	
37	H10.11.21・22	滋賀大津・滋賀県青年会館	41	
38	H11.11.13・14	静岡藤枝・藤枝エミナース	45	
39	H12.11.18・19	京都京田辺・厚生年金休暇センター	36	
40	H13.11.23・24	神奈川大和・六瓢能舞台	51	宿泊:ホテル町田ヴィラ